

インターネットで「後冷泉朝」「後冷泉天皇」を検索していたとき、驚く記事を見付けた。「天喜三年三月十八日、後冷泉天皇刃傷未遂事件」というものである。天喜三年（一〇五五）三月といえば、頼通女の皇后寛子が春秋歌合を催した天喜四年四月のおおよそ一年前で、関白頼通の権勢のもと、中宮章子内親王と皇后寛子が並び立ち、政治も後宮も表面上は穏やかであったと想像されるころである。そのような時期に、天皇刃傷未遂事件のような衝撃的な事件があったとは俄には信じ難かった。記事の出典は下向井龍彦氏「天喜四年四月二十三日東大寺境内殺害事件をめぐる二つの問題―犯人山村頼正の犯罪と追捕使源宗佐の武力編成―」（『史人（広島大学学校教育学部下向井研究室）』二一・一九九八・一二）である。ウェブで閲覧できるので、詳しくは御論考を見ていただきたいが、後冷泉天皇に関わるどころだけをまとめると、『百鍊抄』天喜三年三月十八日条の「左近衛少将忠俊の雑色が抜刀して後冷泉天皇に切りかかり、失敗して蔵人町に逃げ込んだところを、蔵人右兵衛尉源齊頼に追捕されたという」（下向井氏のご論より）事件の犯人雑色を、下向井氏は山村頼正であろうとされている。早速『百鍊抄』当該条をみると、次のようにあった。

〔天喜…筆者補〕三年三月十八日。犯人籠蔵人町。蔵人右兵衛尉源齊頼擲得之。仍蒙使宣旨。郎従源初。小野幸任同給官。件犯人左少将忠俊雑色也。或記云。件犯人抜刀近竜顔。欲奉危国家云々。土記云。抜刀者走入蔵人町云々。

突然「犯人」で始まる記事も珍しいが、「欲奉危国家」の文言はただならぬと思いつながら、どこが天皇刃傷未遂なのか分からず辞書を引きながらもう一度読むと「竜顔（りようがん）。りゆうがん、とも」が「天子の顔」の意で、なるほど「件犯人抜刀近竜顔。欲奉危国家云々」と読めば、犯人が天皇（このときは後冷泉天皇）の顔近くで刀を抜いたが、それは国家転覆（あるいは天皇）を狙ったものらしいとなる。『史料綜覧』で確かめると、当日条は「左近衛少将忠俊（姓闕ク）ノ雑色某、抜刀シテ内裏ヲ犯ス、蔵人源齊頼等之ヲ捕フ」とあり、出典は『百鍊抄』『扶桑略記』で、参考として『中右記』があがっていた。「抜刀シテ内裏ヲ犯ス」の「内裏」は、場所ではなく天皇の意となる。ただ『扶桑略記』には「天喜三年乙未三月十八日。犯人籠禁中。蔵人右兵衛尉源齊頼。并滝口源初。小野幸任等捕件犯人。仍齊頼蒙檢非違使宣旨。初任右兵衛尉。幸任任右馬允」とあるだけで、『百鍊抄』以上に事件の真相がわからない。『百鍊抄』『扶桑略記』の、「犯人」という唐突な書き出しにも拘わらず、何の事件の犯人なのかには触れない記述に『百鍊抄』の「抜刀近竜顔」云々も、「或記云」として記される）、天皇刃

傷未遂などという前代未聞の事件の詳細を記さない（あるいは記せない）、配慮や事情があったのかもしれない。参考としてあがっていた『中右記』は、長治元年（一一〇四）七月九日条の「蔵人右兵衛少尉源齊頼（天喜三年三月十八日以下十五人、元十四人）」を指すのだろうが、これは「依追捕賞蒙使宣旨例」、つまり追捕の賞による檢非違使宣旨の例であり、天皇刃傷未遂事件についての記述はない。また、『百鍊抄』の「土記云」の「土記」は、土御門右大臣と呼ばれた源師房（当時は権大納言）の『土右記』を指すが、現存部分に天喜三年はない。さらに『百鍊抄』は三月十八日条の次は四月二十六日（貴布祢社が水で流損した記事）、『扶桑略記』は五月八日（賀茂・貴布祢社に奉幣使を遣わした記事）まで日付が飛び、当日条以外にこの事件に関わると思われる記事はない。天皇刃傷未遂事件という事の大さを考えると、当時はもつと大騒ぎされたのではないかともあるいは逆に事件そのものも秘された可能性があるかもしれないとも想像するが、現存資料から知り得る情報は極めて少ない（下向井氏の御論考は、この事件のその後等について考察されたもの）。もちろん、『栄花物語』にもこの事件のことは一切記述がない。

平安後期の後冷泉朝は、関白頼通の絶対的な政権下にあり、また東宮が摂関家と直接的な血縁関係にない尊仁親王（のちの後三条天皇）だったこともあって二十四年という長きに及んだ。

わずか五年の後三条朝が院政期に繋がる過渡期として重視されているのは異なり、人事にも大きな異動のなかった後冷泉朝はそれほど突出した印象はない。『栄花物語』に記される「後冷泉院は、何事もたゞ殿（＝頼通）にまかせ申させ給へりき」（卷三十八「松のしづえ」）という後冷泉天皇の人物評に代表されるように、摩擦・衝突の少ない治世という印象があるように思われる。ところが、後冷泉朝には天皇刃傷未遂事件という穏やかならぬ事件もあった。そこで、『栄花物語』からだけではみえてこない後冷泉天皇の人となりや後冷泉朝の特徴（天変地異・事件なども含む）を諸資料から探り、『栄花物語』や『四条宮下野集』『出羽弁集』などを読むときの史的前提とすべく、覚書として記しておく。

まず、後冷泉朝には火災が多かった。度重なる内裏・里内裏の焼亡を『皇居行幸年表』で確認すると、後冷泉朝二十四年間で①永承元年（一一〇四）二月（在所の太政官朝所）・②永承三年（一一〇四）十一月（内裏）・③天喜二年（一一〇五）正月（里内裏の高陽院）・④同年十二月（里内裏の京極院）・⑤康平元年（一一〇五）二月（未使用の新造内裏）・⑥康平二年（一一〇五）正月（里内裏の一条院）を数えることが出来る。⑤新造内裏は未使用であったが、内裏・里内裏以外にも焼亡や放火の記事が相次ぐ。たとえば、永承五年（一一〇五）七月には新造冷泉院が放火され、⑤に関連するが天喜六年（一一〇五）に

は二月に法成寺（東北院・東西院）と新造内裏并中和院・大極殿、三月に神嘉殿が焼亡し、八月に康平に改元された（『百鍊抄』）。なかでも神嘉殿は「神嘉殿遷都以後未有火事。此度始焼亡」（『百鍊抄』同三月二十五日条）というから、人々の動揺も大きかったのではなからうか。さらに⑥一条院焼亡では「壺切劍為灰燼（不被献東宮也）」（『扶桑略記』康平二年（一〇五九）正月八日条）とあり、壺切劍が灰燼に帰した（東宮尊仁親王に壺切劍が献じられていなかったことも興味深い）。『扶桑略記』康平二年条には「今年。皇居連日放火」とあり、焼亡とまではいかないう小火騒ぎはもつと多かったように思われる。その原因は「放火」であった。その他にも、たとえば治暦二年（一〇六六）二月には「主殿寮焼亡。寮家重宝皆為灰燼」（『百鍊抄』二月十七日条）・翌三年八月「主計寮焼亡」（八月九日条）など、焼亡記事は実に多い。前々代の後一条朝は二十一年間で内裏・里内裏焼亡は一度も無かったものの、前代の後朱雀朝では十年間で内裏・里内裏焼亡は四回あったから、後冷泉朝が特に多いというわけではない。しかし、『栄花物語』巻三十四「暮まつほし」には、後朱雀天皇が自分の代での内裏・里内裏焼亡の多いことを「故院（Ⅱ後一条天皇）の廿余年おはしましに、一度だになかりし事を、程もなくかゝる事と歎かせ給」と嘆いたとあり、内裏焼亡は、天皇にとって心痛める出来事と思われる。天皇刃傷未遂事件や建物の度重なる焼亡（放火を含む）を当時の貴

族社会がどのように捉えていたのかまでは記されていないものの、『百鍊抄』や『扶桑略記』が特記する程度には凶事と認識されていたと考える。治世が長ければ天変地異などがおこる可能性が高くなるのも道理だが、後冷泉朝の二十四年間は決して平穩無事ではなかった。

次に後冷泉朝の後宮についても記したい。前掲のように『栄花物語』は後冷泉天皇について「後冷泉院は、何事もたゞ殿にまかせ」と記し、気性が強かったという後三条天皇に比して穏やかな印象を受ける。しかし、「何事もたゞ殿にまかせ」たからこそ、治世・後宮は表面上ならかに収まっていたのではなからうか。後冷泉朝は、天皇と中宮皇子内親王そして皇后寛子の三人が長らく同殿したことが認められるが（ここでは、同一敷地内に在することを「同殿」と呼ぶ）、それ以前の一条・三条・後朱雀朝の妻后並立では、妻后が同殿したことは一度もない。二人の后との同殿を可能にしたのも、後冷泉天皇の人となり・処世法によるところが大きいであろう。また前代の後朱雀天皇や次代の後三条天皇には、それぞれ寵姫といってもよいキサキがいたから、寵姫を作らない（もしくは、寵姫がいたとしてもそれを表面に出さない）のも、穏やかな後宮を可能にしたと思われる。

さて、後冷泉朝には中宮皇子内親王（後一条天皇皇女）・皇后寛子（関白頼通女）・女御飲子（右大臣教通女）の三人のキ

サキがいたが、実際問題として、後冷泉天皇が最も信頼していたキサキは誰であったのかというと、ある時点ではという限定付でいえば、私は中宮皇子内親王だったと考える。『春記』永承七年（一〇五二）七月一日条には天皇の病が記される。

主上勞御事非輕云々、相成、雅忠等云、大如梅核、掖其太深固、仍令沃水可吉也、密々云、灸治御可吉云々、以大竹為樋通水、水口太広、無間斷可冷御云々、渡御中宮上御曹司方、令可此治給云々、王者有此病、是故院御例也、太悲事也

天皇の病は軽くはなく、絶え間なく水で冷やす治療法が採られた。この病は二禁（にきみ。にきん、とも）で、後冷泉天皇の場合は、梅核ほど大きな固い腫れ物であったらしい。当時、二禁は危険な病で、『春記』に記されるように、故院つまり後冷泉天皇の父である後朱雀天皇が命を落としたのも二禁であった。その加治のため、天皇は中宮皇子内親王の曹司に移動している。灸治のための渡御であり、吉方ということもあったかもしれないが、父院が命を落とした重病の治療のために、結果として皇子内親王の在所が選ばれたことの意味は大きいのではないか。皇子内親王は後冷泉天皇の東宮時代の長暦元年（一〇三七）に入侍し、すでに十六年を共にしたキサキである。一方、寛子は永承五年（一〇五〇）十二月の入内からまだ二年しか経っておらず、Ⅱこの時点Ⅱでいえば、命の危機にさらされた天

皇が頼ったのは皇子内親王だったといえるのではなからうか。

なお、七月十二日条によると「藏人信頼云、玉体已無事平御已了、至于今不可有恐、一昨日止水了、時々以蓮葉汁令冷給、十五日可帰朝干飯御方、日者御中宮上御曹司方也者」と、天皇の病は無事に癒え、一昨日（Ⅱ十日）からは水を注ぐことも止め、蓮葉汁で時々冷やす程度までになった。そして十五日には中宮の曹司から朝餉間に帰ることになったという。天皇の治療期間中に、皇子内親王も曹司に在したのかまでは不明だが、あるいは病と治療に苦しむ天皇の側近くにいたのではなからうか。

最後に、後冷泉天皇の性格の一端を示すのではなからうかと思われる記事をあげたい。後冷泉朝では陸奥で前九年の役がおり（これも後冷泉朝の重大事だろう）、康平五年（一〇六二）に平定されたが、『百鍊抄』には次のようにある。

十一月三日。前陸奥守頼義言上梟俘囚貞任等之由。去九月十七日於厨河楯斬首云々。朝家聞食此由有歡感。

「梟」はさらし首にすること、「俘囚」は蝦夷、「厨河楯」は現在の盛岡市にあった砦、「朝家」は天皇一家だが、ここは後冷泉天皇を指すのだろう。去る九月十七日に厨河楯で斬首された阿倍貞任らをさらし首にする由を聞いた天皇は「歡感」があったという。「歡感」は天皇が感心することだから、つまり、貞任らの斬首・さらし首の報告を聞いた後冷泉天皇は感心したことになる。前九年の役の関連記事は『百鍊抄』『扶桑略記』に

たびたびみえるから、長らく朝廷を悩ませた反乱だったことは確かだろうが、それにしても斬首・さらし首などという報告に顔を背けたり、嫌悪感を示したりするのではなく「叡感」があったとは、「何事もたゞ殿にまかせ」ていたという、一見穏やかな後冷泉天皇のイメージとは全く正反対の猛々しい一面をみることができのではなからうか。

以上、『栄花物語』や『四条宮下野集』『出羽弁集』など、王朝文学作品には記されない、あるいは文学作品からは読み取ることの出来ない、後冷泉朝・後冷泉天皇の一面について、覚書のような形で記した。こうした一面があることを踏まえつつ、後冷泉朝に関わる文学作品を読んでいきたいと思う。

『百鍊抄』『扶桑略記』は新訂増補国史大系、『栄花物語』は日本古典文学大系、『春記』『中右記』は増補史料大成による。へゝ内は割注。私に、人物に注を付したところもある。

(1) 詫間直樹氏『皇居行幸年表』(統群書類従完成会、一九九七・一

二)

(2) 「殿にまかせ」ることは決してマイナスイメージではなく、卷三十

四「暮まつほし」では「殿(＝頼通)などにも、故院(＝後一条天皇)はまかせられ奉らせ給て、よろづも知らぬやうにて、あてにけ高くぞおはしましける」と記し、治世を関白頼通に任せた後一条天

皇を高く評価している。

(3) 拙稿『栄花物語』の描く二后並立―後冷泉朝後宮の特徴に関連して―(『明星大学研究紀要―人文学部―日本文化学科』一九、二〇一一・三)

(4) 皇后・女御など、天皇あるいは東宮の妻の意で「キサキ」の語を使い、立后したキサキの意の「后」と使い分けることにする。

(5) 後三条天皇が寵姫源基子とその所生の皇子を手厚くもてなすことに関連して、『栄花物語』卷三十八は、後冷泉院ならば頼通に遠慮してそのようなことはしなかっただろうとする。後冷泉天皇の後宮政策・対応の参考としてあげておく。

(6) 服部敏良氏『王朝貴族の病状判断』(吉川弘文館、二〇〇六・八)

(7) 実際に、阿倍貞任・重任・藤井経清らの首が京都で晒されたのは、翌康平六年(一〇六三)二月十六日(『百鍊抄』・『扶桑略記』)。「扶桑略記」同日条には、これに先立ち、近江国において、降伏した貞任の従者が泣きながら私用の櫛で貞任の髻を梳り、衆人が涙を落としたことが記される。